

宮城発掘物語

昭和30年代の宮城県考古学界

工 藤 雅 樹

今回は昭和30年代から40年代はじめまでの宮城県考古学界の状況を、主として私の周辺のこと限定して述べさせていただく。いささか自分史を語らせていただくことからはじめることをお許しいただきたい。私が大学に入学して伊東信雄先生に師事することになったのは昭和32年のことであった。当時の文学部の制度は二年までは教養部に所属し、三年に進む時に専門が決まる仕組みであったから、本当であれば入学の年からただちに専門の先生にめぐりあうことはできない筈なのだが、私の場合は次に述べるような幸運があつて、一年の時から発掘に参加させていただくことができたのである。

私が文学部に入学したのは、というよりは文学部を受験したのは、もしかしたら合格するかもしれないというかすかな希望があつたからに過ぎず、とくに考古学をめざしたわけではなかった。そして一年目は失敗し、二年目は当時の制度での二期校は東京学芸大学の理科に願書を出していた。ここには有名な天文学史の先生がおられ、高校時代の天文ボーイとしては、そのような選択も十分にあり得たのである。そして当時の私は、天文学の有名な先生の名前は知っていたが、伊東信雄先生をはじめとする考古学の先生方のお名前はまったく知らなかったのである。

たまたま一年時に受講した課目のなかに高橋富雄先生の日本史があり、日本史は嫌いではなかったから相当に熱心に聴講し、夏休みの前のある時間の終了後に先生に何かの質問をしたのだと記憶している。その折に先生から君はどういうことをやりたいのかというお尋ねがあり、考古学とはどのような学問であるのかということもわきまえないままに、考



梅原末治先生来仙 中央梅原先生、右端伊東先生

古学のようなことも希望のひとつであるとお答えしたような記憶がある。それならばということで伊東信雄先生がおられることを教えていただき、伊東先生のもとを訪ねるようというご指導をいただいたのである。伊東先生は当時は教養部の所属であったので、ある日意を決し、当時は富沢分校といていた教養部の先生の研究室のドアを

たたいたところ、夏休みには陸奥国分寺跡の発掘調査があるので補助員として参加してみてもどうかというお話があり、それが私の将来を決めることになった。

陸奥国分寺跡の発掘調査は昭和30年から始まっていたから、私は第三次調査から参加したことになる。また、幸いにもその時から考古学研究室のメンバーとして認知していただくことができたので、それ以来さまざまな調査に連れて行っていただくこともできた。当時の考古学研究室のメンバーは伊東信雄先生、そしてご勤務が終わった後の夜の時間や休日に研究室に来ておられた加藤孝氏、氏家和典氏、大学院に進学されたばかりの伊藤玄三氏、そして一級先輩の林謙作氏であった。私は当然にこれらの諸先生、諸先輩からさまざまなことを教えていただいたのであるが、とりわけ多くの時間を共にした伊藤、林のお二人の先輩から受けた影響は大きかった。両先輩の刺激がなければ私が考古学の道を歩むことはなかった筈で、両先輩には感謝の言葉もない。

さて、伊東信雄先生は戦前には小牛田町素山貝塚（東北帝国大学法文学部奥羽資料調査部『宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』昭和15）の調査に代表されるように石器時代の研究が中心であった。それは若い時に山内清男氏に兄事して多くの石器時代遺跡の調査を行なった経験をふまえたものであった（伊東「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」『考古学研究』24-3・4、昭和52、「伊東信雄先生に聞くー私の考古学史ー」『宮城の研究1』昭和58）。

一方、戦前には歴史時代の研究は内藤政恒氏を中心に行なわれていた。内藤氏によってまとめられた利府町春日大沢瓦窯跡の調査報告書（東北帝国大学法文学部奥羽資料調査部『宮城県宮城郡利府村瓦焼場春日大沢瓦窯址発掘調査報告』昭和14）は、全国的に見ても



福島市赤埴瓦窯跡調査の宿舎にて（中央）伊東先生、（右）内藤先生

屈指のレベルに達していたといえる。内藤氏の研究は瓦とその副産物としての硯を中心としたもので、仙台の松本源吉氏などそれぞれの地域の研究者との交流も深かった。それに加えて内藤氏は宮城県延岡内藤家

の生まれながら磐城内藤家を嗣がれ、その名望も何かと便宜があったのだと思う（内藤「六十年の回想」『日本歴史考古学論叢2』昭和43）。そんなわけで内藤氏の古瓦研究は宮城県・福島県の多くの遺跡の実地踏査によって得られた資料をふまえたものであった（『東北古瓦図録』昭和49）。内藤氏はこれらの豊富な資料を駆使して東北古代史についても発言し、その多賀城起源論などは近年までの定説の地位を占めていた（内藤「上代に於ける陸奥地方の情勢を論じ多賀城建設の一端に及ぶ」『文化』4-11、昭和12）。東北地方の歴史考古の基礎は内藤氏によって形づくられたといつて良い。伊東信雄先生の東北古代史についての考えがまとまった形で述べられているものとしては『宮城県史』第一巻におさめられた「古代史」があるが、そこで示されている多賀城起源論も内藤説をふまえたものになっている。若い頃の私の古瓦研究も内藤氏が提示された資料を追試し、再検討するといった側面が強かったといえる。

内藤氏の東北地方における研究は昭和15年に宮内省に入り侍従（間もなく義宮傅育官が本務となったと聞いている）の職につくことで中断したが、昭和36年に伊東信雄先生が福島市腰浜廃寺の調査を行なうことになったあたりから、東北地方の歴史時代遺跡の発掘調査に調査員として名前を連ねることが多くなり、私も福島市腰浜廃寺や須賀川市上人壇遺跡などの調査で一緒することがあった。

伊東信雄先生の歴史時代遺跡との本格的なかかわりは、陸奥国分寺跡の調査に先立って昭和30年に行なわれた中新田町菜切谷廃寺および昭和31年に行なわれた花山廃寺の調査であった。花山廃寺は花山村所在の平泉時代の寺院跡であるが、伊東先生もこの方面の調査研究はその後あまりなさらなかったし、花山廃寺そのものについては直後には報告されることもなかった（伊東「宮城県栗原郡花山寺跡」『日本考古学年報』9、昭和36、「花山寺考」『東北学院大学論集（歴史・地理学）』4、昭和49、「花山寺跡について」花山村文化財調査報告書1、昭和54）。これに対して菜切谷廃寺跡の発掘は、陸奥国分寺跡、多賀城跡の調査に直結する仕事であり、宮城県考古学史にとっても大きな意義があると思われる。

菜切谷廃寺はすぐ西に位置する城生遺跡に付属する寺院跡で、多賀城創建期および大崎平野独特の瓦が多く出土している（伊東信雄『菜切谷廃寺跡』宮城県文化財調査報告書第2輯、昭和31）。そして多賀城と菜切谷廃寺など大崎平野のいくつかの遺跡から、共通して多賀城創建期の瓦が発見されることをどのように理解するかは、現在でも完全には解決できていない東北古代史上の重要な問題であるように思う。

陸奥国分寺跡の発掘調査は昭和34年まで継続して行なわれ、金堂の東に回廊をめぐらせて塔があったことなど、全国の国分寺跡研究にも大きな影響を与えた成果が得られた。また僧房西建物跡の調査の際に、建物の創建以後に基壇の継ぎ足しが行なわれ、継ぎ足し基

壇の下層の溝から一群の土師器が発掘され、これが基礎資料となって氏家和典氏によって国分寺下層式という土師器の新形式が設定されたことも、宮城県考古学史にとっては重要な出来事であった。

陸奥国分寺跡の発掘調査は宮城県教育委員会、仙台市、河北文化事業団および陸奥国分寺薬師堂興隆協賛会の四者からなる発掘調査委員会が結成され、伊東信雄先生が調査団長となる形で行なわれた。そして調査員には加藤孝、氏家和典、志間泰治、小野力の諸氏が名を連ねたほか、東北大学工学部で建築史を担当されていた飯田須賀斯教授と大学院生の坂田泉氏も加わっていた。東北地方の寺院跡の調査に建築史の専門家が加わった前例には、戦後間もなく国の文化財保護委員会（現在の文化庁）が行なった平泉の無量光院跡の調査があり、陸奥国分寺跡の調査とほぼ同じ時期に行なわれた平泉の毛越寺・観自在王院跡の調査は建築史家の藤島玄次郎氏の主導のもとに行なわれたものであるが、宮城県では陸奥国分寺跡の調査がそのような形の調査団が組まれた最初であったと思う。

全国的に言えば古代の建築遺跡の調査に建築史家がかかわるようになったのは、戦前に行なわれた法隆寺東院伽藍の建物の解体に際して浅野清氏によって地下遺構の調査が行なわれたことや、日本古文化研究所の藤原宮の調査を建築史家の足立康氏が担当された例があり、さらにその先駆としては関野貞氏による朝鮮半島における遺跡調査があった。そして戦後になって継続的に行なわれるようになった平城宮跡や難波宮跡の調査や、その先駆となった飛鳥の飛鳥寺跡、川原寺跡の調査などでは、建築史家が調査員として加わり、遺構の実測にあたっては遣り方実測が行なわれていた。坪井清足氏などは全国にむけて建築遺構の調査には建築史の専門家が参加すべきであること、また遺構の実測には遣り方を用いるべきことを力説されており、陸奥国分寺跡の調査はその一半を実現したものであった。ちなみに宮城県において本格的な遣り方実測が行なわれたのは、整備のための多賀城跡の



陸奥国分寺跡の調査
（左前）伊東先生 （中央）加藤孝氏 （右）小野力氏

発掘調査が当時の多賀城町によって行なわれるようになった段階の、多賀城廃寺跡の掘立柱僧房の調査が最初であったように記憶している。

近年は光波の普及によって遣り方実測を行なう現場はほとんど目にしなくなったが、光波を用いることができない場合には、現在でも遣り方実

測を行なうことが望ましい。光波も用いず遣り方実測も行なわずに、すべて平板だけで済ませてしまつては、昭和30年代の調査にもどつてしまうのではないかと思っている。

陸奥国分寺跡に話をもちそう。調査は前記の調査員の方々がそれぞれの地点を担当し、卒業したばかりの若手や学生は調査補助員としてその下に配属された。私はもちろん調査補助員の末席に加えていただいたのであるが、先輩方には後藤勝彦氏、阿部敏郎氏、伊藤玄三氏、佐々木茂楨氏、林謙作氏などがおられた。また小野力氏は、私が発掘に参加するようになった時には、ご勤務の関係もあつて調査員ではなかったが、時折手伝いに来られ、お話をしているなかで私が卒業した盛岡市の城南小学校の先輩であることが判明し、そのこともあつていろいろとご配慮いただいた記憶がある。また調査員の加藤孝氏は宮城学院に、氏家典氏は第二女子高に勤務しておられたことから、また国分寺跡に隣接することから聖和学園からそれぞれ女子高生が発掘の手伝いに来ていた。また作業員の大部分は高館地区の方々と、毎日ほるほる自転車で通つてきていた。

陸奥国分寺跡の調査の圧巻は塔跡の凝灰岩の切石をならべた基壇が露出された時であつた。そして基壇北側からは七重塔の屋根の先端に載つていた擦管がまっさかさまに地中に突きささつた状況で発見され、その周辺からは鉄製の相輪や青銅製の水煙やその相輪取り付け金具も出土した。擦管の発掘状況は伊東信雄先生の『古代東北発掘』（学生社、昭和48）のカバー写真にも用いられているが、その写真で擦管を発掘している学生が筆者である。

陸奥国分寺跡の発掘が進行中の昭和32年10月に東北大学に考古学の講座が開設され、伊東信雄先生は教養部から文学部に移られた。そしてこの秋の日本考古学協会で伊東先生は「陸奥国分寺跡の発掘」という題で、伽藍配置の様相がほぼ明らかになった陸奥国分寺跡の調査を報告されている。そして一同は、考古学協会に出席するために夜行寝台で仙台駅を発つた先生を、お祝いの意味をこめてプラットホームでお見送りをした。その時の先生の颯爽としたご様子は今も記憶に鮮明である。

昭和32年の秋には涌谷町の黄金山神社境内（黄金山産金遺跡）の発掘調査が行なわれた。この遺跡とその瓦は早く内藤政恒氏によって注目されていた（「東北地方発見の重瓣蓮花紋鏡瓦に就いての一考察」『宝雲』20・22、昭和12・13、「天平産金地私考」『南都仏教』2、昭和30）。黄金山神社の氏子総代であつた佐々木敏雄氏（佐々木茂楨氏のご尊父）はこの遺跡の実態の解明に力を尽くされ、そのご努力によって発掘調査にいたつたものである。調査は伊東先生および学生（伊藤玄三氏・佐々木茂楨氏・林謙作氏および筆者）というメンバーで行なわれ、地元の涌谷高校の生徒諸氏の手伝いもいただいている。私どもは佐々木氏のお宅の離れに泊めていただいたのであるが、私などは大変に格式の高い佐々木家にお

けるおもてなしに戸惑うことしきりであった。調査報告書は『天平産金遺跡』の題で昭和35年に刊行されたが、私個人としては私が実測・製図した瓦の図をこの報告書に載せていただいたのがとても嬉しかったことを記憶している。

この当時は本格的な製図は氏家和典氏の役目であり、陸奥国分寺跡の各遺構や全体の図はすべて氏家氏の手になるものである。氏は昼は勤務があるので、夜間や早朝、あるいは休日に研究室に来られ、製図台の上にトレーシングペーパーをのせて、納得のゆくまで心をこめて作業しておられた。ロットリングもトレース台もない当時、伊東信雄先生がかかわった報告書の図面のほとんどはこのようにして氏家氏が作ったものなのである。

このころに学生たちを帯同して行なわれた伊東先生の発掘には岩手県西磐井郡花泉町中神遺跡（縄文晩期、昭和33）、青森県南津軽郡田舎館村垂柳遺跡（弥生、昭和33）、岩手県胆沢郡金ヶ崎町西根古墳群（昭和34）、岩手県北上市五条丸古墳群（昭和37）、福島市腰浜廃寺・宮沢瓦窯跡・赤埴瓦窯跡（昭和36・38・39）、須賀川市上人壇遺跡（昭和36）などがあり、筆者も参加させていただいているが、宮城県外のことなのでここではふれない。

なおこの時期には宮戸島調査会による宮戸島貝塚の発掘調査が行なわれている。これは教育学部の平重道教授をトップにいただく組織で、加藤孝氏の指導のもと、主として東北大学教育学部の関係者が調査にあっていた。私が宮戸島貝塚の発掘に参加させていただいたのは昭和33年、34年で、33年には寺下囲地区の、34年には台囲地区の発掘メンバーに加えていただいている。本部は宮戸屋という旅館だったが、学生は島の医王寺の本堂に合



宮戸島貝塚調査時の合宿所（医王寺）
前列左から加藤孝、平重道、田辺健一の諸先生

宿したものである。個人的にはこの発掘に参加できたことは後までも私にとって大きな財産となった。なお台囲地区の発掘には酒造業を営んでいる方と聞いたが茨城県の広瀬氏という方が参加されたことがあり、氏は日本考古学協会会友ということであったが、ひとつのトレンチの出土品は氏のもとで整理するというので茨城県に運ばれるということなどもあった。

宮戸島貝塚の調査では斎藤良治氏、佐藤達夫氏、後藤勝彦氏、阿部敏郎氏などが中心的なメンバーであり、学生では桜中（平沢）英二郎氏、槇要照氏、

芳賀良光氏などが活躍しておられた。これらの方々の主なる研究成果は雑誌『地域社会研究』や『仙台湾周辺の考古学的研究』（昭和43）に掲載されている。また縄文時代を中心とする加藤孝氏の研究成果は『宮城学院女子大学研究論文集』の各号に掲載されている。

昭和36年からは多賀城跡の発掘調査がはじまっている。陸奥国分寺跡の調査は昭和34年で終わっているのに、発掘調査という点では一年間の空白があったことになるが、昭和35年には多賀城跡の発掘調査に先立って、大縮尺の地形図を作成するなど、それまでにはなかったような準備が行なわれている。また昭和36年秋には陸奥国分寺跡の調査報告書が刊行されており、昭和35年は伊東先生をはじめとする方々はその原稿の作成など大変に多忙であった筈である。私も主として各遺構ごとの種類別の瓦の点数を数えて表にまとめたり、瓦の実測図を作成したりして若干ではあるがお手伝いをした。

多賀城跡の発掘調査の体制も、基本的には陸奥国分寺跡の場合と同じで、県内の主なる研究者が調査員となり、若手と学生が調査補助員として参加した。調査は最初の2年が多賀城廃寺跡（当時は高崎廃寺跡といった）、その後の3年が多賀城跡の政庁の発掘を行なった。そしてこの一連の調査成果をうけて史跡整備が行なわれることになり、昭和41年からは多賀城町が主体となって整備のための発掘調査が行なわれ、さらに多賀城跡調査研究所の設立につながってゆくことになる。

そして多賀城跡の発掘調査がはじまるころになって私はようやく学生のなかの最下級生ではなくなった。それは横山勝栄、二宮満雄、足立勝昭、小笠原好彦、桑原滋郎、阿部義平、遠藤勝博、石神怡、平口哲夫、相原康二、八巻正文、須藤隆、松井泉、加藤豊切、芦野（石神）幸子、横山英介、藤沼邦彦、進藤秋輝などの、その後各地域各分野で活躍し、現在の学界をリードしている方々が研究室のメンバーに加わってきたのである。また芹沢長介先生のご赴任もあった。

このころこれらの方々と行なった多賀城跡以外の発掘には、石巻市沼津貝塚（昭和38）、仙台市陸奥国分尼寺（昭和39）、築館町館貝塚（昭和41）、涌谷町長根貝塚（昭和43）などがある。そして陸奥国分尼寺では金堂の中心部から鎮壇に用いたかと思われる土師器の甕が発掘され、その中から経巻の一部かとも思われる金箔が発見されたこと、館貝塚では数体の屈葬人骨が発掘され、そのなかには二体を合葬したものがあったこと、長根貝塚では宮城県で最初に完全な形での竪穴住居跡を検出することができたことなどが記憶に新しい。またその間、昭和37年の夏には奈良国立文化財研究所で行なわれた研修に参加することができ、考古学の坪井清足氏、田中琢氏、岡田茂弘氏、河原純之氏、建築史の沢村仁氏、工藤圭章氏などから大規模遺跡、建築遺構の調査法や遺物の観察・整理法を教わり、伊東信雄先生のご理解もあって、その一端を多賀城跡の調査などで実践できたことも思い出であ

る。

そして昭和40年代以降は宮城県の考古学界にも大規模発掘の波が押し寄せ、多くの方々が県や市町村で活躍するようになった。そしてそのような状況のなかで私も多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館準備室、東北歴史資料館で、あわせて10年間宮城県教育委員会のお世話になったのであるが、この段階以後のことは多くの方々のご記憶にも新しいことであろうし、いずれどなたかが紹介なさるであろう。なお本稿で述べたようなことも含めて、私のこれまでの東北考古学とのかかわりと、私の現在の東北の古代文化や古代蝦夷についての考えがどのようにして形づくられていったかについては拙著『東北考古学・古代史学史』の「あとがき」で述べているので、参照していただければ幸いである。



館貝塚調査風景

左から加藤豊仞氏、八巻正文氏、伊東信雄先生、石神怡氏